

財団だより

## 多摩川

1985. 9. 第27号



アキアカネ (トンボ科)

夏は山間ですごし秋に山から下りてくる。体色は夏に黄色、秋は赤くなる



鳳凰の舞・1984.9.30撮影  
(写真・日の出町教育委員会提供)

## ■ 多摩川博物誌 ■

## ⑪ 鳳凰の舞 (西多摩郡日の出町平井春日神社)

九月の最後の日曜日、西多摩郡日出村平井の鎮守春日神社の祭礼に、全国にも例の少ない舞が奉納される。舞手の冠に鳳凰がついてるところから、鳳凰の舞と呼んでいる。

この舞は元來雨乞芸能であった。明治頃までは雷神に扮した男が、竜神を背に負うて、舞行列の先頭に立って一緒に舞った。また小野小町の大人形を作って、そばに雨蛙を配って「ことわりや日の本なれば照りもせん、ざりとてはまたあまが下とは」といふ小町の歌を書いた幟を立てた花車を曳いたという。天が下で雨蛙を配したあたり茶気がある。

この舞は鳳凰四人、ささら四人、軍配持一人、小太鼓持一人が舞方。大小の太鼓二人、笛一人、花傘万灯持一人、奴十五人がつく。この奴というのは年少の男子ばかりで、白袴を十字に綾取り、素足に草鞋ばき、腰帶うしろに小幣をさし、とき色の鉢巻、頬に紅を丸くつけ、鼻筋に白粉の一本棒、赤襦袢に揃いの單衣を着て、友禪か、うこんの三尺帯を垂れ結びにして、尻ばしょりの草鞋ばき、左に扇子、右に厚紙の角鐙をはめた木太刀を持って、祇園囃子に合わせて左足を踏み出し、木太刀を逆手にもって突き出し、開き扇を左から右へと回し、次にその反対の足どりで、扇は背中へまわして反り返る。こうした姿勢をくりかえして、輪になって踊る。二輪めぐると、囃子と歌があって、中腰しゃがみをして太刀を杖にもって、先頭が声張りあげ、

「エッヘン、昔のむかしその昔、禁裏の御所の御よろこび鳳凰舞を奉る、まことに目度う候いける、ホホ

敬って申す

という。この申し立てにはすべて初めに「エッヘン」終わりに「ホホ敬まって申す」を必ずいうことになっている。

「エッヘン俺が隣の花嫁は、親に孝行早起きで、糸ひき織り稼ぎ女郎、座敷をおっぱけお茶を煮ろ、お玉杓子が駆け出した、ホホ敬って申す

この調子でいろいろな面白い立てを順送りに申す。昔は自分で考え作ったが、今は出来ているものを並べている。そして最後に

「エッヘン恐れ多くも九重の雲井の御殿踏み散らす、君が齢の涯りなく千秋万歳、お暇すいざや友達、ホホ敬って申す

で引き揚げる。

これは歌舞伎芝居の荒事という一種の演劇中に出てくる、劇人物のつらねまたは、割りせりふといっている、次々へ渡してゆく言葉形式を真似たもので、鳳凰の舞が京都の亡命公卿から伝承されたとも、京都見物のとき教わって来たという伝えをそのまま受け取るとして、その一連になる芸能とは思われない。これは少なくともある時代に付け加えられたものと思われる。それにしても江戸市川流の芸統が見えるところが資料となる。つらねはこの他に、「菅原伝授手習鑑」「東海道五十三次」といったものがある。そのいずれにも雨に關係のある文章が出てくるので、この舞が雨乞に關係のあることがはっきりしている。

奴舞が終わると鳳凰舞になる。大太鼓を蓑に包んで地面の上を転がしてくる。これは村中の各所で行なうので、かついで歩くことをはぶいてのことである。太鼓を中心として、鳳凰、ささらと八人が交互に輪になる。その外を軍配扇持、小太鼓打が立つ、中の輪は右まわり、外の輪は左回りに移動する。鳳凰が二本撥で向き合って太鼓をドンドンと二つ打ち、他の二人はふちを叩く、これを入れ替えてくり返し、開いて腰おとしの太鼓を見る形をする。そのときは右足が出る、右手の撥は右に伸ばす。左の撥は左の肩に真直ぐ立てる。左の足の出の時は、その反対。外輪の軍配と小太鼓は少し早足で「ソリヤモッテコイ」と掛声して回る。この二人はいつも内輪と対照的な位置である。

打込唄

「大内山に紫の瑞雲たなびく幾八千代、鳳凰舞うてことほぎぬ

雨乞唄

「大岳山の黒雲、雨がざんざと降って来一たこれに掛かれ夕立やい

この歌と舞で一庭すむと、打出しといっで「石町」という囃子で、

打出し唄

「<sup>ん</sup>京の中立、都の生まれ伊勢育ち、腰に差いたは伊勢の御祓い、ハーリーヤヤきりをこまかに拍子を揃えな一よ、麒麟も出る大御代に大鳥いくつ、むつまじく目度く茲に舞い納む

があって、その場の雨乞舞は終わる。そして太鼓を転がし転がし次の場所へ行く。雨乞行事なので本当は日は決まってないが、定期的には鎮守社の祭の日に行なっている。

「東京生活歳時記」社会思想社 1971

※本文中の日の出村は昭和49年に町に昇格、がここでは原文通りに記載した。

# 多摩川散歩

## ●丹波溪谷

ナチュラリスト 田辺 薫

国鉄青梅線終点奥多摩駅よりバスにゆられること1時間余にして山梨県丹波山の宿に着く。

ここから青梅街道沿の多摩川の最奥部約8kmが丹波溪谷と呼ばれているのである。

奥多摩には多くの溪谷美を誇る所があるがその中でも丹波溪谷は最高のものであろう。

甲武の境、笠取山の下から流れだした水は一ノ瀬川となり、これが柳沢川と合流して丹波川となる。

この川の両岸はブナ、シオジ、サワグルミ、ミズナラ、カエデ類を主林木とする天然林でせばめられ、また山腹から尾根にかけて針葉樹もみられる。

溪谷はV字型で狭く谷壁の角度は直角にちかく、河床は浸蝕作用が盛んである。河床の平均勾配は一ノ瀬川橋から三條橋の間約1/30、三條橋から丹波宿間約1/40程度である。

本流に流れこむ支流もまた深いV字型の谷で支流にはさらに支谷が多くその谷底は粘板岩、硬砂岩が露出し、所によっては巨岩、奇岩が見受けられる。

丹波溪谷の景観は高冷な天然林の織りなす森林美と神秘をひめた清流によって成形された溪谷美である。特に新緑と紅葉は一段と美しい。また溪谷一帯は東京都の水道水源林で極めて重要な役割をもっている。

さて前おきはこのくらいにして奥秋の部落から上流落合に向って歩くことにしよう。道は丹波川の左岸に沿って上る。奥秋藤尾の間約10kmその間一軒の人家もない。

奥秋を出て800m程行くと大萩谷橋がある。この辺から対岸を見ると雑木の中を糸のように細い滝が見える。これを不動滝と呼んでいる。紅葉の時はその色のコントラストがよい。

熊倉橋を渡ってフッサスの林道入口（江戸時代の一ノ瀬へ出る道）を経て間もなく本流に架けられた余慶橋を渡り右岸300m程行くと奇勝絶景地ナメドロがある。

ここはナメドロ川が丹波川に合流する所で兩岸断崖相迫り暗峡探勝地の一つである。（宛字滑漕は使用しないこと。）

ナメドロから進むこと約800m羽根戸橋で丹波川を渡り道はまた左岸をとる。

このあたりも兩岸が迫り流れは激しくまた時に清潭を示している。

土地の人に云わせると川の狭部を岩魚釣が飛び越えるので跳戸と云っていたのが何時の頃から羽根戸となってしまった。

羽根戸飛越の岩も絶景の一つである。

近くの路傍に川へ突き出た枝振のカエデが目をはく俗に「見返りもみち」と呼んでいるが以前は紅葉が美しかったが昨今は老令のためか昔の面影

はない。

ここから更に300m程進むと旧青梅街道（明治11年開通）の時船越橋と云う吊橋が対岸に架けられていた。今はない。

「武蔵演路」大橋方長撰 安永9年(1780)で「多摩川の水源は舟越といへる辺にて」とある。

また「甲斐国絵図」文政8年(1825)をみると舟越、丹波山、オヤ川の記入がある。国土地理院の地図からも消えている。

船越から2.2km程行くと三条新橋がある。その少し手前に牛金沢と云う所がある。この淵の底深くに武田家の軍用金の一部で大きな黄金の牛が沈められてあると云う。

旧青梅街道は右岸の小室川に架けられた橋を三條橋と呼んでいた。

この辺一帯は珍らしく河床が広く川の流れも静かである。

「甲斐国志」松平定能編 文化11年(1814)は「此地ハ一ノ瀬、黒川、一本木の三流会湊スルガ故ニ三重川原ト云」とある三條は三重の転訛したものと云う。

三条新橋の袂の小高い一画に東京都知事 東龍太郎の書になる「尾崎行雄水源踏査記念碑」がある。ここは塩山市である。

ここから一ノ瀬川橋まで2.5kmもあろうか、兩岸は迫り標高も900mちかく深山幽谷の感じがする。特に紅葉の季節の景観は感動的である。

大戻(いんぼり) (狼犬すら進むことが出来ない程の悪場)の上流に坊主淵の深潭がある。ここも武田家没落の後、黒川金山の僧侶12名を投げこんだ所と云う。

一ノ瀬川橋を渡って少し行くと柳沢川を見る、そこに銚子のような形に見える滝つぼがある。これがよく知られている「おいらん淵」である。「玉川沂源日記」山田早苗著 天保13年(1842)に「丹波川の上の谷川に五十人淵といふあり、さるは黒川の遊女どもを連れてきて、落とし沈めしと云、

丹波溪谷はここで終ることにする。

ここから柳沢川に沿って2.5km程行くと藤尾部落（金左エ門家敷）3軒の人家がある。萩原山の中心部落、落合までは更に1kmを行かなければならない。

多摩川で昔からの自然景観が残されている所としたら、それは恐らく丹波溪谷であろう。

## 案内図



## 私と多摩川



調布地先・菅の渡舟  
(昭和45年NHK TV『東京の百年・多摩川』  
の一コマ、舟上は筆者)



筆者散歩コース  
国立地先の多摩川堤防(昭和48年頃)

### 三世代おつき合いの川

作家 原田重久

明治、大正、昭和と三世代を生きてきた私は、多摩の甲州街道べりに生まれ(明治34年生まれ)育ったこともあって、歩いて10分という近くを流れている多摩川は、わが心のふるさとであり卑近な表現になるが、半生を通じてのくされ縁みたいなつながりを持つ河川だ。

くされ縁などといったが、且ての多摩川とのおつき合いには、あまり悪い思い出はない。単的にいって、明治から昭和初年までの多摩川は「おらが川」であった。川底まで透いてみえるすすろかな流れ、外来種の濁らない月見草や蒲公英、青白く光っている玉川砂利、葦切と鮎刺しと鶺鴒と……どれをとっても「おらが多摩川」の風物は心の洗われるようなものばかりであった。

おとなになってから私はNHKの契約ライターとなり、放送台本を書いてくらすようになった。私が多摩川べりで生れそこの住人であったこともあって、何回も多摩川を舞台に使ったこともあり、ロケーションで上下流を訪れたりしている。

晩年になって郷土史物を手がけ、十数冊の郷土読物を書いているが、その何れにも「おらが多摩川」のあれこれが採り入れられている。かりに自分史のようなものを書くにしても、私と多摩川とのつながりを切り離すことはできないだろう。いまでも私の日課の午後の散歩コースにはこの多摩川べりが入っている。自然と足が向いてしまうのだ。

太平洋戦争終幕後の多摩川が、それまでの「清き流れ」をかなぐり捨てて、「世にもおぞましき悪川」となってしまったことは周知の通りである。私はこれまでに多摩地区20余校の校歌も作っているが、その中に「清き流れの…」という形容詞をいくつか使っている。それらはすべて死語となってしまった。いまさら「濁れも濃ゆき」などと訂正するわけにもいくまい。

多摩川の浄化とか、鮭の稚魚の放流とか、川を愛する人々がさまざまな運動を行っているが、果してどこまでこの人達の真意が浸透されるだろうか。関係市町村などでは、この人達の声に呼応して、何故もっと積極的に多摩川の浄化に手を染めないのだろうか。市報などで申訳ばかりのキャンペーンを1、2回してそれでおしまい。多摩川などの浄化はお題目だけではだめである。もっとじつくりと腰をすえて、できるだけ時間と金をかけて、四つに組んでやってもらわないことには、もうあの「清き流れ」は永久に戻って来ないだろう。これは国が本腰を入れてもらうことは断わるまでもないが、さらに沿岸住民の協力が必要なことは言をまたない。

鮭の遡上は夢かも知れぬが、蛍が出て、沢蟹や山女が泳いで、人工プールなどいなくなる水のきれいなふるさとの母なる川を……という希いはもう空中楼阁なのだろうか。散歩のついでに向けていた足の鈍らないむかしの多摩川の再現を、待望することしきりのきょうこのごろである。

よみがえ

## 甦れ！多摩川

### ●相つぐ住民による自費出版

山道省三

いかなる場合もそうだろうが、学問の源泉はフィールドにある。とくに自然や歴史の類は現場を発掘しない限り生きた資料は得られない。とうきゅう環境浄化財団が昭和52年から一般研究（草の根研究）と称して専門の研究者とは別ワクで研究募集を行おうとした背景には、地元のことを地元の人が一番良く知っている。こうした住民から学術的な効果はむろん、より新鮮な情報が得られると同時に、住民の方々にも研究に参画してもらうことが、多摩川的环境研究に大いに役立つと考えたからである。これまで59年度末で56件の研究がスタートしてすでに37件の研究報告集が完成した。

このように熱心な住民の研究意欲を反映するかのようこのところ多摩川流域の各所で、さまざまな内容のものが自費出版されている。この一年に出版や製作が行われたものを新聞のスクラップの中からひろい出したら11件あった。文末に一覧表をつくったが、その内容が実にユニークでこれぞまさしく草の根研究の観がある。多摩川をテーマとした詩集、写真集、イラストマップ、八ミリフィルム、歴史書、ガイドブック、太鼓音楽など。そしてこうした研究の重要な点は個人がコツコツと古い資料を収集したり、聞き取りをしたり、あるいは自ら体験した事を整理したものばかりであるから、相当な年月とともに内容的にも味が濃いものばかりである。現在この種の個人研究は自費で出版しない限り日の目を見ないのであるが、財団も現状では出版費の助成は行わないまでも、資料を整理したりまとめたりするための研究には従来通り力を注ぎたいと考えている。文末に取りあげたのはおそらくその一部の事例であろうし、潜在的にはまだ多くの貴重な研究資料がまだ眠っていることも知っている。こうした資料が何らかの形で表に出ることは、学術的にも大きな影響を及

ぼすことはもちろんだが、地道な研究が住民の手で行われることに大きな感心を持つ。環境に対する啓蒙の時代から自主研究の時代へ移りつつあることの証しがこのところ見え始めた気がする。

#### この一年の自費出版・製作目録

- ・「多摩川の詩集」 亀田多喜 (59.9)
- ・「多摩川物語—上中流七十年史—」 根岸律男 (59.11)
- ・「多摩川名寺百選」 嶋崎政男、島田洋一、清水啓文 (59.11)
- ・「三世代遊び場図鑑」 荻原礼子他

#### その他自治体と協同で出したもの

- ・「新・日野の植物ガイドブック」 日野の自然を守る会、日野市 (60.5)
- ・「多摩川の流れ、三部作(太鼓音楽)」 大田区荏原流れ太鼓、ひびき会 (60.5)
- ・「はむらの植物ガイド」 主婦、教師の市民グループ植物調査会、羽村町 (60.7)
- ・「川のはたらき～多摩川のすがた」スライド資料集 川崎理科サークル、代表 阿部国広 川崎市立住吉小教諭 (60.1)
- ・「写真集、多摩川は語る」 東京立川ライオンズクラブ、三田鶴吉編集 (60.2)
- ・「八王子市川口郷土みてあるき絵図」 高沢寿民、岩倉節 (60.2)
- ・「八王子山田町わが街」 清水正之 (60.3)
- ・「多摩川水系における川漁の技法と習俗」 安齋忠雄 (60.5)
- ・「ふるさと風土図いまとむかし(八王子市加住地区)」 三橋良雄 (60.5)
- ・「西多摩郡名勝誌(復刻版)」 樹青梅法人会、清水棟太郎会長 (60.6)
- ・「多摩川の四季(八ミリフィルム)」 黒川弘志、黒川厚志 (60.6)

※ ( )内は新聞発表年月

## 財団の事業紹介

### 〈研究助成〉

助成集報（第10巻）及び多摩川環境調査助成集（第6巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

#### 助成集報（第10巻）

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●多摩川上流いわゆる奥多摩地域の環境保全のための資源調査および応用地理学的研究—第1部—	徳久球雄	青山学院大学教授
●多摩川水系における川漁の技法と習俗	安斎忠雄	安斎宣伝研究室代表
●石けんへの切替えが多摩川の水質および底質に及ぼす影響の評価	須藤隆一	(社)日本水質汚濁研究協会理事
●多摩川水域微生物相の季節変化に関する研究	出口吉昭	日本大学農獣医学部教授
●多摩川流域の都市におけるヒートアイランドの気候学的研究	山下脩二	東京学芸大学教育学部助教授
●多摩川底泥構成物質の毒性学的研究	大石真之	都立衛生研究所毒性部所員
●野川流域における水循環機構に関する試験流域による研究	高橋裕	東京大学工学部教授
●多摩川中流の河辺植生における多様性の成立機構についての研究	佐伯敏郎	東京大学理学部教授
●多摩川河川敷植物群落の動態解析	廣井敏男	東京経済大学教授
●多摩川に発生するユスリカ類の種類・分布とそれらの水質指標性および水質汚染浄化能の研究	佐々学	富山医科薬科大学学長
●多摩川に生息する魚類の魚病相と再生産力に関する研究	日比谷京	日本大学農獣医学部教授

#### 助成集（第6巻）

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●子供達に科学的な自然認識を得させるために郷土の多摩川をどう教材化するか—“川のはたらき”多摩川のすがた・スライド資料集—	阿部国広	川崎市立住吉小学校教諭
●多摩川と高校生物—高校生物の野外実習の場に多摩川をとりあげ、多摩川の汚染の現状と環境保全について考えさせる—	彦坂滋春	都立永山高等学校教諭
●多摩川の底生動物の生態をもとにした環境教育プログラムの作成	橋上一彦	東京学芸大学附属小金井中学校教諭
●多摩川の水質と環境調査—第1部 多摩川についての市民意識調査・第2部 多摩川の水質調査報告—	斉藤雅茂	法政大学第二高等学校教諭
●等々力溪谷（八沢川）の武蔵野台地露頭の地層中に含まれる化石珪藻の研究	小出悟郎	神奈川県広域水道企業団水質試験所
●多摩川源流域の陸水学的研究	角田清美	都立小平南高等学校教諭

## 秋季多摩川流域の自然環境に関する催物一覧

多摩川流域で秋季行われる主な催物を掲載しました。詳細は各主催者に問い合せて下さい。

### ● 講演会

開催日	行事名	主催者	参加方法
9月14日 (13:00~17:00)	「水環境と都市」シンポジウム ・KAWASAKI '85 -都市の川と用水は今…-	同左実行委員会 事務局長 井田安弘 ☎ 044-932-1366	会場…川崎市総合自治会館 (参加自由・参加費500円)

### ● 自然観察会

開催日	行事名	主催者	参加方法
9月14日	観察会「鳴く虫とのふれあいをもとめて」	日野の自然を守る会 ☎ 0425-82-0696 片岡方	18時30分…豊田駅南口集合(雨天の場合豊田地区センター) (参加自由)
9月7日	観察会 「鳴く虫を聞く会」	多摩川の自然を守る会 ☎ 03-480-8384 横山方	15時…小田急線泉多摩川駅前集合 (夕食を一緒の場合) 18時30分…現地集合(夕食は別の場合) (参加自由)
10月6日	多摩川を歩く会 「多摩大橋~関戸橋」(約11km)	同上	9時30分…青梅線中神駅前集合 (参加自由)
11月10日	同上 「関戸橋~京王多摩川」(約10km)	同上	9時30分…京王線中河原駅前集合 (参加自由)
12月1日	同上 「京王多摩川~二子橋」(約10km)	同上	9時30分…京王多摩川駅前集合 (参加自由)

### 新刊紹介

#### 「景」山河計画3号

木原啓吉、進士五十八編 1985年  
 (株)思考社 東京都江東区北砂5-20-4-1012  
 TEL 03-648-9127  
 定価 1800円

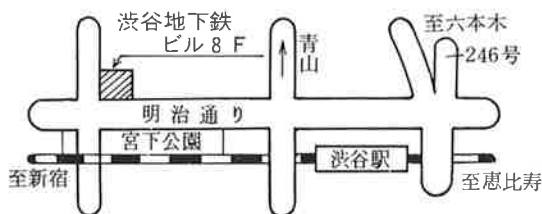
風景、景観の“景”をさまざまな観点から考察した現代風景論集。研究者、技術者、行政、住民の立場など27名にも及ぶ各界の識者による風景論の展開は、この難しいテーマにいくつかの視点を与えてくれる。

#### 水質調査法(改定2版)

半谷高久・小倉紀雄共著  
 丸善(株) 東京都中央区日本橋2-3-10  
 定価 4500円

水の基本的性質、現象からはじまり水質調査の具体的な方法や解析について多摩川などの調査結果を用いながら解説した解り易い指導書。水質に興味を持つ方々にとって必読の書ともいえる。

- 発行日 昭和60年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
 〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
 (渋谷地下鉄ビル内)  
 TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
 TEL (0488)31-8125